

福山市における「子育て見つめ直し体験プログラム」の効果（その1）

— アンケート調査と感想文より —

八重樫 牧子⁽¹⁾・田丸 尚美⁽²⁾・正保 正恵⁽¹⁾・平田 道憲⁽³⁾・今川 真治⁽³⁾

The effects of the child-rearing support program for reflective experience in Fukuyama City(1):

Based on the Questionnaire Study and the Descriptions

YAEGASHI Makiko⁽¹⁾, TAMARU Naomi⁽²⁾, SHOUHO Masae⁽¹⁾, HIRATA Michinori⁽³⁾, and IMAKAWA Shinji⁽³⁾

In this research, we organized a Child -Rearing Support Program for reflective experience and conducted the pre/post program questionnaire survey. By examining the results of pre/post questionnaire survey and the descriptions of participants' sentiments, we found following facts : 1) there were individual variations about the change of the maternal anxiety' s score, however the result of post-program questionnaire demonstrated higher score than the result of pre-program questionnaire ; 2) this result was probably caused by mothers' first experience to separate from their children and reflection of the child-rearing; 3) the number of requests to participate regularly in a Child -Rearing Support Program has increased; 4) talking their own way of child-rearing among mothers created "sympathy" , reflected and glanced over themselves which gave them to have a vision of child-rearing in the future; 5)mother' s feelings of separation from their children had changed as their children were accustomed themselves to separate from their mothers.

Keywords : maternal anxiety, child-rearing support program, pre/post questionnaire Survey

1. はじめに

子育て中の親を支える人的・物的環境の変化はめざましく、多くの親たちは育児ストレス・不安を抱え生活をおくっており、子育て家庭に対する子育て支援の必要性が高まってきた¹⁾。このような中で、地域の子育て家庭への支援として、平成19年度から地域子育て支援拠点事業が展開されている。地域子育て支援拠点事業は、①地域の子育て中の親子の交流促進、②育児相談、③子育て関連情報の提供、そして④子育て及び子育て支援に関する講習等の実施によって、子育ての孤立感、負担感の軽減を図り、全ての子育て家庭を地域で支える取組として拡充がなされてきた²⁾。地域子育て支援拠点事業の実施主体は、市町村であるが、社会福祉法人、NPO法人など民間への委託なされている。これらの地域子育て支援拠点事業の委託を受けた機関・施設で

は、様々な子育て支援プログラムの開発・実践が展開されている³⁾。

子育て支援プログラムについて宇野⁴⁾は、在宅で乳幼児を育てている養育者への支援方法として心理教育プログラムに着目し、その研究の現状と課題を明らかにするために文献研究を行っている。子育て支援プログラムについて実証的研究を行っている25論文を取り上げ、①日本において独自に実施・開発されたプログラム、②海外から輸入され適用されているプログラム、③夫婦を対象とするプログラムの3つに分類し、分析・考察した結果、6つの視座を明らかにしている。

筆者らも、地方中核都市である福山市において、母親の育児ストレスの実態を把握し、どのような子育て支援ニーズを持っているか検討を行い、その結果をもとに試行的な

⁽¹⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科

⁽²⁾ 福山市立大学教育学部児童教育学科非常勤講師

⁽³⁾ 広島大学大学院教育学研究科

子育て支援プログラム「ちいと待ちょうてえ」を設計し、実施した⁵⁾。春に2講座（①ふくやま応援センター：4組の親子，②駅家倉光コミュニティ：3組から5組の親子）を実施し，秋に1講座（③ふくやま子育て応援センター：10組の親子）を実施した。プログラムの内容は，講話をきっかけにした語らいによる交流，親同士の共同保育，子どもからの分離体験であった。プログラムに参加して，共に語り合うこと，共同で保育すること，一人になる時間を持つことの体験が，どのような効果を持つのか明らかにするためにプレ・ポストアンケート調査による評価を行った。その結果，「育児不安得点の平準化」がみられた。また，育児からリフレッシュする必要性は減少したが，リフレッシュ後の育児負担感には大きな変化は認められないことがわかった⁶⁾。さらに，秋のプログラムの最終回に実施したインタビュー調査の結果を分析し，事例を検討した結果，それぞれの母親が共同保育とリフレッシュを必要とする個別の背景を抱えていることが分かった。また，プログラムに参加することで日頃の負担感を減らしたり，すぐに解決したりすることはできなくても，それらを「吐き出し」，お互いに「聴く」ことで共感し合える関係をつくるまでの仕掛けとして，このプログラムが機能していたのではないかとすることが明らかになった⁷⁾。

そこで，本研究では，この「語り合いの機能」に着目し，このコミュニケーションとリフレッシュのためのプログラム「ちいと待ちょうてえ」を検討・修正し，第2プログラム「子育ての見つめ直し体験プログラム」を設計・実施し，その効果を検討することを目的としている。

2. 研究方法

研究方法は以下の通りである。

- ①コミュニケーションとリフレッシュのためのプログラム「ちいと待ちょうてえ」を検討・修正し，新しい子育て支援プログラム「子育ての見つめ直し体験プログラム」を設計する。
- ②福山市立大学内において，2012年9月18日から11月19日まで，1歳半から1歳11か月の同年齢の子どもを持つ母親を対象にプログラム（全7回）を実施する。
- ③プレ・ポストアンケート調査を実施する。第1回目にプレ・アンケート調査を実施し，最終回にもう一度同じ内容のポスト・アンケート調査を実施する。そして，第1回目に実施したプレ・アンケート調査と最終回に実施したポスト・アンケート調査の結果について比較検討を行う。調査内容は，参加者の属性，子育て環境，育児（育児不安や育児の省察力），リフレッシュ，時間意識（タイム

プレッシャー），育児サポートなどである。なお，育児不安については，牧野⁸⁾の育児不安14項目から10項目を選択し，使用した。

- ④毎回感想分を書いてもらい，最終回にグループ・インタビュー調査を実施し，内的な変化を聴きとる。なお，グループ・インタビュー調査の結果については，別稿で述べることとする。

3. 分析方法

育児不安項目については，「よくある」に4点，「ときどきある」に3点，「ほとんどない」に2点，「全くない」に1点を付加し，逆転項目には修正を加え，育児不安が高いほど，得点が高くなるように育児不安の平均得点を算出する。プログラム実施前後の平均育児不安得点の差を算出し，検討を行う。

リフレッシュ，時間意識（タイムプレッシャー），育児省察力，育児ネットワークについては，順序尺度で回答を求めているので，プログラム実施前後の順位の変化をみるために，順位差を算出して検討を行う。

第2回セッションから第6回セッションまでの5回分のセッションの参加者の感想文については，①各回の講話とその後の語らいに関するものと，②母子分離に関わるものの2つの視点から分析を行う。

4. 倫理的配慮

倫理的配慮については，福山市立大学研究倫理規程（福山市立大学規程第74号）に従った。調査結果を記述するにあたっては，個人が特定されないように配慮した。

5. 研究結果および考察

5-1. アンケート調査結果

(1)「子育ての見つめ直し体験プログラム」

本プログラムの内容は，表1に示す通りである。プログラムは，最初に母親に対して講義を行い，その後ディスカッションを行うというものであった。ただし，第6回はグループワークを行った。どの回にもお母さん同士が少人数で話をする機会を設けた。初めの第1回と最後の第7回を除いたセッションでは，母親と子どもの母子分離を試みた。ほぼ全員が初めての母子分離であった。託児は保育士などの専門家をお願いした。また，メールによる情報交換も行った。

前回のプログラムと今回のプログラムの大きな違いは，前回は短い講話の後に親による共同保育を実施し，保育を担当しない親は自由なリフレッシュタイムをとることができたことであった。今回のプログラムでは，親による共同

表1 プログラム日程と内容

実施回数	月日(曜日)	プログラム内容	備考
第1回	9/18(火)	趣旨説明	全員
		アンケート調査用紙に記入	
		自己紹介	
		ルールを話し合いで決める(グループワーク)	
第2回	10/1(月)	「ちいとはなそうやあ」(子育てで困っていることなど)	親子分離
		メーリングリストの作成	
		ウォーミングアップ	
		講義「リフレッシュ」	
第3回	10/15(月)	「ちいとはなそうやあ」	親子分離
		共同保育	
		ウォーミングアップ	
		講義「忙しさについて考える」	
第4回	10/22(月)	「ちいとはなそうやあ」	親子分離
		共同保育	
		ウォーミングアップ	
		講義「海外の子育て支援, 女性の生き方」	
第5回	10/29(月)	「ちいとはなそうやあ」	親子分離
		共同保育	
		ウォーミングアップ	
		講義「親の心, 子どもの心」	
第6回	11/12(月)	「ちいとはなそうやあ」	親子分離
		共同保育	
		ウォーミングアップ	
		グループワーク「自分のイライラを見つめて」	
第7回	11/19(月)	「ちいとはなそうやあ」(ふりかえり)	全員
		アンケート調査用紙に記入	
		共同保育	
		ウォーミングアップ	

時間はいずれも10:00~12:00

保育は実施せず、子どもは保育の専門家に任せ、母親が子どもと離れて講話に参加し、母親の語り合いの時間をとることができるようにしたことであった。

(2) 参加者の属性

表2は、参加回数と参加人数を示している。参加者は8組の親子であった。AさんとBさんは全出席であった。DさんとHさんは参加回数が4回とやや少なくなっていた。参加者の属性は、表3に示した通りである。子どもの年齢は、

1歳半から1歳11か月とほぼ同じくらいの年齢であった。子どもの人数は、8人中5人が1人であった。家族構成はすべて核家族であったが、Hさん以外は1時間以内に実家(父方、母方、両実家)があった。なお、参加者の内1人はフルタイムの仕事をしていたが、他の参加者は無職であった。

参加者の育児サポーターについては、表4に示したように、パートナー、母方親、父方親をあげている人が多く、誰もいないと答えた人はいなかった。しかし、育児サポーターの人数については、AさんやBさんは多く、DさんやHさん

表2 参加回数と参加人数

	1回目	2回目	3回目	4回目	5回目	6回目	7回目	参加回数
	9/18	10/1	10/15	10/22	10/29	11/12	11/19	
Aさん	○	○	○	○	○	○	○	7回
Bさん	○	○	○	○	○	○	○	7回
Cさん	○	○	○	×	○	×	○	5回
Dさん	○	×	×	○	×	○	○	4回
Eさん	○	○	○	○	×	○	×	5回
Fさん	○	○	○	×	○	○	○	6回
Gさん	○	○	×	○	○	○	○	6回
Hさん	○	×	○	×	○	○	×	4回
参加者数	8人	6人	6人	5人	6人	7人	6人	

表3 参加者の属性

	年齢	参加子ども			こどもの人数	家族	実家との距離	
		年齢	順番	性別			父方	母方
Aさん	35～39歳	1歳10か月	第2子	男	2人	核家族	1時間以内	遠方
Bさん	25歳～29歳	1歳10か月	第1子	男	1人	核家族	1時間以内	遠方
Cさん	25歳～29歳	1歳8か月	第1子	男	1人	核家族	1時間以内	1時間以内
Dさん	30歳～34歳	1歳11か月	第1子	女	1人	核家族	1時間以内	1時間以内
Eさん	35歳～39歳	1歳8か月	第3子	男	3人	核家族	1時間以内	遠方
Fさん	35歳～39歳	1歳9か月	第2子	女	2人	核家族	1時間以内	1時間以内
Gさん	25歳～29歳	1歳10か月	第1子	男	1人	核家族	1時間以内	1時間以内
Hさん	25歳～30歳	1歳3か月	第1子	男	1人	核家族	遠方	遠方

表4 参加者の育児サポート

		パートナー	母方親	父方親	保育所の先生	幼稚園の先生	支援センターの職員	知人・友人	サークルの仲間	誰もいない	記入数
Aさん	1回	○	○	○		○			○		5
	2回	○	○	○		○		○			5
Bさん	1回	○	○	○			○	○	○		6
	2回	○	○	○				○	○		5
Cさん	1回	○	○	○							3
	2回	○	○	○							3
Dさん	1回	○	○								2
	2回	○	○								2
Eさん	1回	○	○	○				○			4
	2回	○	○	○				○			4
Fさん	1回	○	○	○							3
	2回	○	○	○							3
Gさん	1回		○	○							2
	2回	○	○	○							3
Hさん	1回	○									1
	2回	△	○	○							2.5

は少なく、個人差があった。

(3) 育児不安得点

育児不安得点は、表5、図1に示す通りである。プレ調査の育児平均得点は2.3点、ポスト調査では2.5点であった。プログラム実施後の方が育児不安得点は高くなっていった。ちなみに、2009年に実施した福山市における1歳半健診での平均育児不安得点は2.41点であった⁹⁾。プレ調査の育児不安得点はこれより低くなっていったが、ポスト調査では、これより高くなっていった。

しかし、育児不安得点については個人差がみられた。DさんとEさんについては、最初からは育児不安得点が高く、プログラム実施後もあまり変化がなかった。Cさん、Gさん、Fさんについては、最初の育児不安得点はやや高く、プログラム実施後もさらに育児不安得点が高くなっていった。Aさん、Bさん、Hさんは、最初から育児不安

得点は低く、プログラム実施後はやや育児不安得点が高くなっていった。

前回の秋プログラムの育児不安得点については、最初比

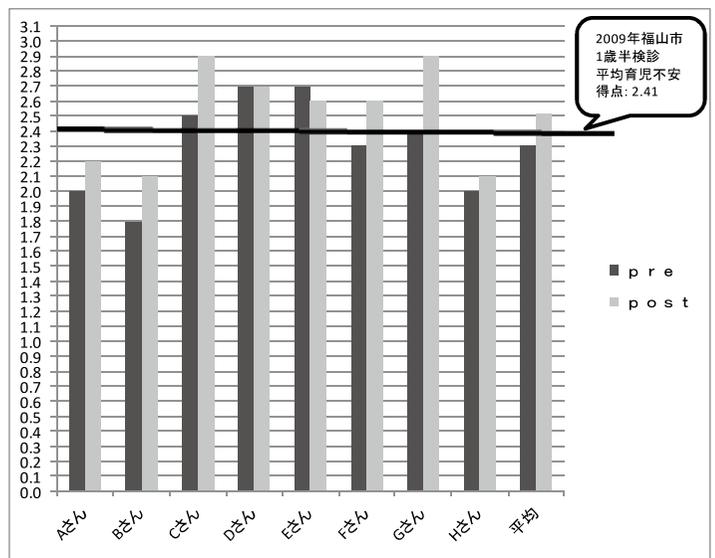


図1 育児不安得点

くなっていた。HさんやGさんの育児省察力もやや高くなっていた。AさんやBさんの育児省察力はやや低くなっていた。CさんとFについては変化が認められなかったが、Cさんは最初から育児省察力が高く、育児不安得点も高くなっていた。

育児ネットワークについては、表5からわかるように「行きたくない」と答えた項目はなく、全体的に肯定的な回答が多くなっていた。また、プログラム実施後に、肯定的な変化があった人が多かったが、特に「自分の時間が持てるような定期的な集まりを持つような取組があったら参加したいとおもいますか」という項目については、プログラム実施後はAさん、Bさん、Cさん、Eさん、そしてGさんが、「行くと思う」と回答しており、肯定的な変化が認められた。なお、Dさんは、プログラム前後とも「行くと思う」と答えていた。Hさんは、プログラム前後とも「行ってみたい」と肯定的な回答はしていたが、変化は認められなかった。

5-2感想文の結果

(1) 講話のテーマを受けての「語らい」に関する各回の感想から

第2回から第6回の講話に関する感想の記述を整理・分析した結果、「共感」、「振り返り」、「見渡し」、「発見」の4つの内容に分類された。それぞれの記述は以下の通りである。

<共感>

- ・「自分と重なる部分がたくさんあった。」
- ・「皆がんばっていることがわかった。」
- ・「自分だけではないと気が楽になった。」
- ・「他のママさんも同じ思いだったということがわかっただけでも、いい気分転換になった。」

<振り返り>

- ・「日々成長していく子どもをかわいいと思う反面、うるさい・面倒くさいと思う気持ちも強くなっていった。もう一度子どもとの関係を考える機会になった。」
- ・「リフレッシュは大切と思いつつも、子どもを預けて親だけ遊びに行ってしまうことへの罪悪感、友達との会話の有効性など自分と重なる部分がたくさんあった。」
- ・「気づかぬ間に時間に追われているのかな…。」
- ・「頭ではわかっているけど実践できていない、思い当たることが盛沢山。」
- ・「子どもに感情的になっている自分を、子ども自身に気づかされていたので、少しショックで反省した。」

<見渡し>

- ・「自分のイライラの原因は、息子よりも夫だと気づいた。」

・「日本しか知らない私と両家の親、この環境でやっていくものだと思っていた。」

・「子育てについて充実している国はいいなあ。国など大きな単位で子育てで等みんなで助け合っていく制度が大事なのではと思った。」

・「仕事をしたいけど、家庭を持ったら辞めるべきと思っていた。」

<発見>

・「日々の生活の当たり前のことの中にも、統計をとってみると日本の実態や習慣がなるほど…とよくわかった。」

・「時間の使い方をゆっくり考える機会がなかったので新鮮。毎日同じような刺激のない生活と思っていたが、考え方ひとつでメリハリのある生活になるのではないかと考えた。」

・「育児が終わってからの期間も長いのだと知った。」

「イライラの原因は自分の中にあるような気がする…それを見つけて楽しく子育てしていきたい」、「もっと周りに助けを求めながらできたらいいと思う」という記述にもあるように、テーマを共有して語り合う中で、「自分を相対化し、これからの展望をつかむ」作用が生じることわかった。

(2) 母子分離に関わる各回の感想から

ほとんどの参加者にとって、初めての母子分離体験であった。母子分離に関する感想を分析した結果、「積極的な感情」と「分離への戸惑いと捉え直し」に分類できた。それぞれの記述は以下の通りである。

<積極的な感情>

- ・「子どもと離れる機会が持てるのは嬉しかった。」
- ・「子どもなしでゆっくり話せる機会があまりないので、とても貴重な時間がすごせた。」
- ・「子どもに邪魔されずに話を聞くことがないので、とても集中して聞けた。」

<分離への戸惑いと捉え直し>

- ・「子どもはまた泣いて眠ってしまった。でも離れるのも大事と思って、次回もがんばりたい。」
- ・「今日は離れるのが分かったのか、最初泣いてしまった。再会した時は笑顔で迎えてくれて嬉しかった。」
- ・「途中で子どもの泣き声も聞こえず、集中して聞けた。」
- ・「離れている間も前回ほど泣かなかった様で、子どもの成長を感じた。」
- ・「いつも泣き疲れて寝てしまう息子。今日は泣くのもそこそこに外を見て過ごせたと聞き安心した。成長したのだね。」

・「私の姿が見えなくても普通に遊んでいたようで、初めの頃のように泣くこともなく、子どもにとってよい刺激になっているよう。」

以上の記述からわかるように、子どもと離れることへの戸惑いがみられたが、子どもと離れることによって、母親自身が得るものと子どもの変化（見通しと再会）もあり、双方にとっての「慣れ」と出会い直しがみられた。

6. まとめ

育児不安得点については、前回の子育て支援プログラム「ちいと待ちょうてえ」では、プログラム実施後に「育児不安得点の平準化」がみられたが、今回のプログラムでは、個人差はあったが、全体的に平均育児不安得点は高くなっていた。今回のプログラムは完全な母子分離であり、積極的な感情や捉え直しもあるものの、戸惑いもあり、これが育児不安に影響を与えていた可能性があると思われる。プログラムが育児省察力に与える影響は、個人差があったが、プログラム実施前、あるいは実施後の育児省察力の高い参加者は、育児不安得点が高くなっていた。

以上のように、プレ・ポストアンケート調査結果から、「子育ての見つめ直し体験プログラム」に参加することによって、育児省察力が深まる傾向がみられたが、育児不安得点は、むしろ高くなる傾向もみられた。また、リフレッシュ効果もあまり認められないことがわかった。しかし、自分の時間を持てる定期的な集まりの参加希望が高くなっており、本プログラムがプラス体験になったと推察される。

また、感想文を分析した結果、母親同士での「語り」によって、養育にあたる者としての共感が生まれ、その中で自分自身を振り返り、自分を取り巻く周囲を見渡し今後の育児の展望を得る効果が認められた。子どもからの分離についての感情は、子どもが慣れるとともに変化していくこともわかった。

八重樫¹⁰⁾は、子育て支援について次のように定義をしている。「子育て支援とは、子育てをする親の主体性とニーズを尊重し、親の養育機能を高めるために親としての成長を促し、親のウェルビーイングを保障し、エンパワメントをはかり、同時に地域の養育機能を高めていくような社会的支援の総称」である。今回、「子育ての見つめ直し体験プログラム」に参加した母親は、育児省察力が深まり、一時的には育児不安は高まったかもしれないが、感想文の記述からもわかるように、エンパワメントされたことが推察された。

また、宇野¹¹⁾は「1次の子育て支援心理教育プログラム」

とは、一般の養育家庭を対象に早期介入を行い、養育力の底上げによって子どもの発達を保障し、ジェネラルなプログラムを実施し、一人ひとりのウェルビーイングの向上や、子育てしやすいコミュニティを形成することを目指すものであると述べている。したがって、本プログラムは、日本において独自に実施・開発された「1次の子育て支援心理教育プログラム」であると言える。

親のウェルビーイングを保障し、エンパワメントを促進する子育て支援プログラムとしては、カナダで開発された「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」があるが、宇野も指摘しているように、日本でも実施され効果検証も始められている¹²⁾。

今後、さらに福山市において子育て支援プログラムを開発、実践していくためには、「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」など他の子育て支援プログラムも参考にしつつ、さらに語らいを促す設計や母子分離に対する配慮を検討することが、課題となってくるであろう。

なお、本研究は、平成25年度の挑戦的萌芽研究「リフレッシュによる育児不安低減のための『子育て共同化』プログラムの開発」(研究課題番号23650446, 研究代表者:平田道憲, 研究分担者:正保正恵, 田丸尚美, 今川真治, 八重樫牧子)の成果の一部である。

また、本研究の内容については、2013年度日本家政学会第65回大会(2013年5月19日, 昭和大学, 東京)において、以下のテーマで口頭発表を行った。八重樫牧子, 正保正恵, 田丸尚美, 平田道憲, 今川真治「福山市における『子育ての見つめ直し体験プログラム』の効果(その1)一参加者のプレ・ポストアンケート調査より一」と、田丸尚美, 八重樫牧子, 正保正恵, 平田道憲, 今川真治「福山市における『子育ての見つめ直し体験プログラム』の効果(その2)一参加者の感想文を検討して一」である。

注

- 1) 八重樫牧子(2012)『児童館の子育ち・子育て支援一児童館施策の動向と実践評価』相川書房, 1-13。
正保正恵(2013)「地方都市における既存ネットワークの活用と新しいネットワークへの展開一岡山市・福山市の子育て支援を中心に一」日本家政学会家族関係学部会誌『家族関係学』(32)に投稿中を参照のこと。
- 2) 地域子育て支援拠点事業は、「子ども・子育てビジョン」においては、1万か所(中学校区に1つ)の設置を目標として掲げられ、平成24年度における全国実施箇所数は5,968か所となっている。さらに、平成24年8月に成立した「子ども・子育て支援法」では、子

育て家庭が子育て支援の給付・事業の中から適切な選択ができるよう、地域の身近な立場から情報の集約・提供を行う「利用者支援」が法定化され、従来の基本的な支援機能（子育て親子の交流の場の提供、育児の相談・援助や講習等、育児に役立つ情報のお知らせ）に加え、「利用者支援機能」や「地域支援機能」を付加し「地域機能強化型」の地域子育て支援拠点事業が創設された。従来の「ひろば型」と「センター型」は統合されて「一般型」に再編され、「児童館型」は「連携型」に再編された。（出典：厚生労働省『地域子育て支援拠点事業』http://www.mhlw.go.jp/bunya/kodomo/dl/kosodate_sien.pdf）

- 3) 地域子育て支援拠点事業として実施されている子育て支援プログラム以外にも、大学・地域・行政の協働による子育て支援なども実施されている。たとえば岡山県備中県民局は「子育てカレッジ」を実施し、地域の重要な社会資源である大学内に子育て支援拠点を設置し、大学の専門知識等を生かした地域のモデル事業などを実施しており、2008年4月に子育てカレッジ第1号として新見公立大学内に設立され、現在では「おかやま子育てカレッジ」として12か所の大学等が指定されている。また、公益財団法人ひろしまこども夢財団は、広島県内の大学と協働し、大学内でカナダ生まれの子育て中の親支援プログラム「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム（NP）」を実施しているが、福山市立大学においても、平成25年度（10月2日から11月20日まで）の「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム（NP）」を実施している。
- 4) 宇野耕司（2012）「乳幼児を育てている養育者を対象とした日本における心理教育プログラム研究の展望—子育て支援心理教育プログラムのための6つの視座の提案—」子ども家庭福祉学, 12, 1-11を参照のこと。宇野が指摘した6つの視座とは、以下の通りである。①1次の子育て支援心理教育と2次の子育て支援心理教育及び3次の子育て支援心理教育に分類できること、②心理教育プログラムと実生活との連動の重要性、③子育てにまつわる価値の多様性と主体性の尊重、④参加者同士の学び合い、⑤子育て支援施設における心理教育プログラムの科学的根拠の追及、⑥子育て支援における夫婦関係の重要性である。なお、子育て支援における心理教育については、宇野は、中釜の論文を引用して、「子育てについてすでにわかっていること、実証的・経験的に見出された知見を、学び手の心理状態に細やかに配慮しながら伝達することで、子育て技能の向上や問題解決に役立てようとする働きかけ」（中釜洋子（2007）「子育て支援の心理教育」日本家族心理学会編、家族心理学年報「家族支援の心理教育—その考え方と方法」, 25, 34-45）であると規定している。
- 5) 正保正恵、平田道憲、今川真治、高瀬智子は、2008年の日本家政学会中国・四国支部研究発表会において、「広島県福山市における子育て支援ニーズ（その1）—専業主婦像の変容と新しいニーズ—」について口頭発表を行った。正保正恵（2013）前掲書を

参照のこと。

- 6) 正保正恵、平田道憲、今川真治は、2009年の日本家政学会中国・四国支部研究発表会において、「広島県福山市における子育て支援ニーズ（その4）—コミュニケーションとリフレッシュのためのプログラムと効果—」について口頭発表を行った。正保正恵（2013）前掲書を参照のこと。
- 7) 正保正恵、田丸尚美、平田道憲、今川真治は、2010年の日本家政学会第62回大会において「広島県福山市における子育て支援ニーズと共同保育プログラム（その3）—ニーズ実現のための共同保育と参加者のリフレッシュ—」について口頭発表を行った。正保正恵（2013）前掲書を参照のこと。
- 8) 牧野カツコ（1982）「乳幼児を持つ母親の生活とく育児不安>」家庭教育研究所紀要, (3), 34-56。および牧野カツ子（1988）「く育児不安>の概念とその影響要因についての再検討」家庭教育研究所紀要, (10), 23-31。を参照にした。
- 9) 正保正恵（2013）前掲書を参照のこと。
- 10) 八重樫牧子（2012）前掲書を参照のこと。
- 11) 宇野耕司（2012）前掲書を参照のこと。
- 12) 宇野耕司（2012）前掲書を参照のこと。

宇野は、「ノーバディズ・パーフェクト・プログラム」について効果検証を行っている論文として、柴田俊一（2010）「親教育プログラムNobody's Perfectの短期的効果について」子どもの虐待とネグレクト, 8 (1), 114-118をあげている。そのほかには、以下のような論文がある。岸田康子、田村毅、倉持清美（2010）「乳幼児を持つ母親グループを対象とした親支援活動の評価」東京学芸大学紀要 総合教育科学系, 61 (2), 45-50。吉村真理子（2011）「ノーバディズ・パーフェクト（Nobody's Perfect）プログラム参加者の変容のプロセス」千葉敬愛短期大学紀要, (33), 25-34。小椋知子、高岡昂太、伊藤真（2009）「親教育新プログラム“Nobody's Perfect（完璧な親なんていない）”の参加者アンケートによる質的研究（1）：参加者が評価するNPプログラムの構造」, 日本教育心理学会総会発表論文集, (51), 271。高岡昂太、伊藤真、小椋知子（2009）「親教育新プログラム“Nobody's Perfect（完璧な親なんていない）”の参加者アンケートによる質的研究：プログラム終了後の参加者の変化」日本教育心理学会総会発表論文集, (51), 272。伊藤真、小椋知子、高岡昂太（2009）「親教育新プログラム“Nobody's Perfect（完璧な親なんていない）”の参加者アンケートによる質的研究：参加者が求めるプログラムへの改善・要望点から」日本教育心理学会総会発表論文集, (51), 273。

（2013年11月18日受稿，2013年12月3日受理）